

六花

RIKWA

3

俳句雑誌りつか

2016 (平成28年)

cover design Yuna Mizuno

山田六甲

雪中に

印

去りがたし雪田の鶴こぶの背中かな

白鳥の背筋伸ばして見せにけり

深まよ更なかの畑は鴨にうごめける

寒鯉に届きて深き灯かな

寒鴉不即も不離も手がは向ざる

鴨の夢破つて鳧の飛ぶ夜かな

末黒野のごろ石白く乾きたる

祠から祠へ畑を打ちにけり

牡鶏のちちんぷいぷい春の雪

一輪のむめに心を絞りけり
春塵に化粧けはひされゐるすずり箱
甘藍のとり尽くされし畑かな
爪痕や忘れ形見の紙ひひな
もも咲かそ余命に利息つかねども
オリオンは春へ傾き賤ヶ岳
淡海には対に御座おはせし月おぼろ

祝ヤスコ句集『玫瑰』

雪中に咲くと玫瑰咲きにけり
友禅のがま口書架の雛とす

ひとしきり犬の鳴けるへ白鳥来
かがようて波の果なる小白鳥
枯蓮に水の蒼さの強まりぬ
通り過ぐ風に縫れる枯芒
田仕舞の煙とどまる神の山
神^か南^む備^な山^みに従ふ山の眠りけり
一水の曲りに集ふ鴨の群
曲りきて光あらたに冬の川
大寺の池の四隅を散紅葉
花^は柊^な母^むの忌日の過ぎにけり

小春日や伊根の漢の京言葉

廣畑 育子

こはるびやいねのおとこのきょうことば ひろはたいくこ

小春日や伊根の漢の京言葉

参道に茶の花の麤くすぐりぬ

這松に落葉次々降りにけり

高^{たか}稲^は架^はや^ぎ内海の風静かなる

夕芒内海に聴ぐ波の音

昔は、京言葉が日本の中央語で、事実上の標準語であった。現在も丹後半島は京言葉の圏内だったのだ。初冬の穂やかな春のような日を小春という。小春は陰暦十月の異名で小六月とも。陰暦十月は現在の十一月頃。この頃は、春のような穏やかで暖かい日が続き小春日和などとも言う。伊根は丹後半島の北東部に位置し、舟屋で知られる。この句の場合「漢の京言葉」がはんなりしていて佳い。京都市内から離れた丹後半島でも荒々しそうな漁師が意外や意外、京言葉で話すのを聞いた驚きが伝わってくる。「男」とせず屈強な男性を思わせる「漢」を使ったのも成功。

冬は雪待ちつつ夜のしじまかな

菊谷 潔

日 が 暮 れ て ま た 日
が 暮 れ て 年 暮 る る
めでたさも入費も嵩む老の春
閑けさや霜畳して今朝の春
冬は雪待ちつつ夜のしじまかな

雪を楽しみたい期待が閑かな夜になるとつる。確かに雪の降っている夜は雪が音を吸収して閑かであるが、降る前の静けさもある。今夜はもしかしたら雪が降ってくるかもしれない、という期待が膨らむのである。冬は寒くて身体に堪えるが、雪が降れば寒さを和らげる。雪の降る楽しみは、子供心のようにいままも衰えない。主宰も常々雪の降る山里へ住みたいと願望がある。実際に雪中の生活は大変な労苦が伴うが、作者のような期待感はいつもある。俳句手法として冬と雪は重複するので「冬」を省くのがいいかと思ったが、無聊なひと冬の夜の楽しみへ転換する風雅さを諾う。

雪卿集

田鶴

升田ヤス子

花 朶こぼれて苔の隙間かな
おでん煮てひと日の暇いとま乞ひにけり
鍋鶴の着地の脚を出しにけり
鍋鶴の陣を大きく啄める
泥探る子鶴に母の佇たちみたり

年用意

松本文一郎

研ぎたてや白菜の芯こ試し剪り
冷じや半裸の声の高たか高たかと
貼紙の猫の家出や十二月
あれそれにこれと応こたへし年用意
年の暮絶えて久しき賞うら与享うらく

雪卿集

灰神楽

佐津のぼる

目つむりて枯るる音きく野の仏
泥の手で煙草啣へる蓮根掘
切干の反りはじめたる日ざしかな
灰神楽たてて終りぬ落葉焚
着ぶくれて切符はどこへ入れたやら

柀の花

永田万年青

柀の花の垣根に近づけり
花柀棘まるやかになりにけり
柀の葉裏に花の犇めける
窓を打つ霰に夢の途切れたり
数へ日や成すべき事の増えゆける

雪樹集

師走

藤生不二男

空缶の転がりきたる師走かな
霜枯の野に青草のひとところ
裸木の地に添ふ影の濃かりけり
数条の雲を射抜きし冬日かな
大寒の長き回廊渡りけり

片手枕

赤松有馬守破天龍正義

慎みて花柎を見てをりぬ
一枝の花柎を見てしめり
師走かな草津足湯で戻るのも
つれもなし片手枕の秋の航
冬枯るる多摩源流の水軽ろし

蛍雪譚

六甲選



二十八年三月号鑑賞

連句百韻は百句を連ねて満尾とし、個人よりも百吟ひとまとめで一つの作品とするため、その座の連衆の達成感はあるが現代には向かない。「俳句は座の文芸」と思っていたが、どうも違つ。現代の座はお互いを刺激しあう場ではない。現代は発句が発展独立したものであり一句をもつて完結するはずで、個の文芸と言えよう。従つて下五を連用形で止めると（止めるというより止まらない）一句完結ができない。ただし、句の内容によつては余韻を引きたいため連用止めもあり得る。あり得るが良しとするかしないかは個人の趣味次第。主宰もこのごろ使いたい気持ちも起つてくるが、お鳴らをしながら歩くようではまらない。その雰囲気は六花の皆さんに伝わり連用止めは見かけないので安心してゐる。連用止めしなくても余韻を引く作品はいくらでも出来る。六花「印」二月には節分の「福は内」を季題として詠んでみた。歳時記にはないけどチャレンジ。二月号に永田耕衣の「二ヶ月の罪なき下駄を下ろしけり」という句について確かどこかに書いた記憶があるのに、どこに書いたか忘れた。耕衣の句を解く鍵は二月―旧正月。下駄Ⅱ正月に下ろす。下駄Ⅱ人の足に踏まれる。下駄の前世に罪があるのか。下駄Ⅱ桐の木、琴になるものと下駄になる物の運命の分かれ目などをヒントにすれば耕衣の句も解りやすく、別に難解ではない。そういう視点で改めて永田耕衣を見直すのも今後の課題。新しい視点の永田耕衣論を期待する。「春雪や行方も知らずで現役下駄 耕衣」。まるで六花の主宰みたい。

蓮の実の飛んで緑起の良き日かな

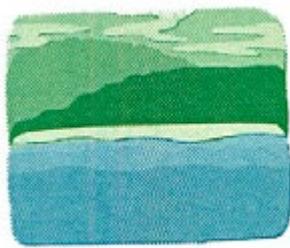
志方 童子

蓮の実が開花と同時に実が付いているので、「因果同時」や「因果俱時」といって、衆生から仏になるのではなく、衆生の段階で仏の性質をすでに具えている、ということをお教ではない。花びらが散り秋が来て実がはちすから零れて落ちる。そのことを蓮の実飛ぶと昔の俳人は飛躍して表現したのである。実が飛ぶ日は縁起が良いというのも前向きなとらえ方で良いことだ。ちなみにはわが家に保管している蓮の穴は数が決まっているかと数えてみたが様々である。蓮根の穴も決まっていらない。蓮根は見通しが良くなると言って縁起を担ぐが、同様に実が飛んで穴があくと見通しがよくなるのかも。

花柊こぼれて苔の隙間かな

升田ヤス子

柊の花は目立たない。「えっ花が咲くの？」と驚く人がある。主宰も昔はその一人だったが、まことに目立たない花で、しかし気品ある香りは一等。柊の葉の棘に二指を軽くあて息を吹きかけると風車のように回る。それほどまでに子どもの頃から馴染みの花であった。モクセイ科モクセイ属の常緑小高木だから香りは木犀に通い、散り方も同じ。その清楚な花が苔の隙間に落ちているとだけ言った。苔に落ちた柊の花は空から零れた霰のように苔の隙間に護れているのである。ヤス子はそろそろ写生句に活路を見だしはじめているのではないだろうか。





3月号
到着順

平居 濤子

神農の虎ビル風に首揺らす
惜し気なく柚子投げ込まる冬至の湯
何示す折れ線グラフ蓮枯るる
寒き夜の闇の深さに家軋る
去年今年空港橋に灯の流れ

大内 幸子

採りたての匂ひ囲みて根深汁
一通り読み返し閉づ古日記
窓からの原風景や年忘れ
糶田や空地はソーラー張り詰めて
自分褒め励ましもして年詰まる

小林はじめ

一張羅まとひてけふの雪ほたる
しづけさに綿虫われに近づきぬ
大綿は浮くかのごとく飛びぬたる
雪婆の知盛塚に群れぬたる
おだやかな方丈あたり雪の虫